



編集月旦 2013年4月号

★昨年は大正100年。「大正生まれ」が百寿期に達したということになります。新しい歌は「春の小川」、流行語は閩族打倒でした。今年は昭和88年なので数えて米寿。この年の歌は「この道」、流行語はモガ・モボでした。大正生まれの人びとは母さんが歌う童謡を聞いて育ったのでした。

☆しかし「大正生れ」の歌からは苦勞しつづけた男たちのぼやきが聞こえてきます。

「♪大正生れの俺達は・・・」戦友として仲間を失い、生き延びて「企業戦士」として戦後の復興と高度成長を働きずめで成し遂げ、ほっと一息ついた1975～80年ころ。50～60歳代になったわが身を省みて歌った歌には、「昭和生れ」の子どもたちの行く末を思うとまだ休んじゃいられないと、お互いを鼓舞したのでした。

☆「大正生まれ、二等兵の平和思想」は、中公新書『田中角栄—戦後日本の悲しき自画像』の著者早野透氏の講演の趣意です。早野さんは「金権政治の戦後政治家」像に覆われてきた田中角栄を、民主主義・金権政治・平和思想という多面的なファクターで見直しています。その平和思想の体験的モデルを、石橋湛山の「小日本主義」や大河内正敏の「農村工業」の地域開発に求めています。日中平和交渉とともに「列島改造」という地域改革は、田中角栄の「大正生まれ、二等兵の平和思想」の表現であり、それは丸山真男や渡辺恒雄や山中貞則氏と共有するものであるとみています。たしか村山富市さんもそうでした。

☆大正12=1923年1月20日生まれの俳優三国連太郎さんが他界されました。

★「アベノミクス」効果に浮かれすぎていないでしょうか。物価の値上げ、次第に拡大してゆく各界の格差。先人が労苦してこしらえたみんなが等しく豊かになる「大同型社会（九割中流）」が、目の前で解体していきます。みんなが等しく豊かになる方向を見失ってまで「アベノミクス」に期待していいものかどうか。安倍総理の所信表明演説にも施政方針演説にも「高齢者参加」を呼びかける文言は見出せません。ですからこのまま任せておいては高齢者が安心して暮らせる社会にむかうことはないようです。

☆「デフレーション（萎縮）」からの脱却を掲げた安倍政権の「成長戦略」をしくじると「財政巨大赤字・企業収益格差・国民世代不和」によってこの国は自力浮揚の方途を失います。3000万人一人ひとりの力による「成熟戦略」が持続可能な経済成長戦略です。

★「国民の活力」というと、すぐ若年層の「成長力」に求めるのが旧来の思考です。「世代交代論」がそれ。増えつつける高年者層の優れた「成熟力」「継承力」によって新たに形成される経済社会は、持続的成長力をもっています。その理解のためには「多重型思考」が必要です。「日本長寿社会」は「三代多多重型社会」なのでですから。それによって初めて国民のもつ全活力による「経済全体のパイ」が見えてきます。

★「ナノコーポ」（小規模高齢起業）が水玉模様のように各地にひろがっています。高齢社の上田（研二）さんは伝道師のようにその「ノウハウ」を伝えて多忙なようです。同社の「かじワシ」は仁木（賢）さんの企画による「女性版」。月に5万円ほどの定収入を得てしごとをする喜びは無償ボランティアとは異なった充実感を与えてくれるようです。

★『東大がつくった高齢社会の教科書』がでました。9月検定まで「検定対策」としてじっくりと読みこんでいきますので、お付き合いください。

★一人ひとりが長寿であること、長寿になることを喜べる「日本長寿社会（超高齢社会）」の達成とアジアに住むみんなが力を合わせてつくる「アジアの共生（豊かさの共有）」は、ふたつながら平和の証であり日本高齢者の課題であり本誌の課題です。（編集人・堀 亜起良 堀内正範 記）

